

んだよなあ。」とA子を指名する有様である。

そんな中で、女子の目を意識したのか、D男が「俺がやってやるよ!」と長縄回しをかって出た。メンバーはただ黙っている。担任はみんなに聞こえるような大声で、「偉いぞ! D男君! そういう仕事が大事なんだね。すばらしいぞ。」と叫んだ。

これをきっかけに、B男とD男は、大きな声で「いち! に!」と言いながら練習を始めた。他のメンバーは、長縄回しの難しさを知っているためか、積極的に声に合わせて跳ぶようになる。

他のグループでは、49回を最高に、2回目の記録への挑戦をすでに終わっていた。

息を合わせて・・・

Yグループは明らかに他のグループから遅れている。しばらくすると練習中になんとなくだらだらした様子が目立ってくる。「始め」の合図さえ誰も言わない。

担任としては、他のグループからの遅れを意識させるより、自信をつけさせることの方が大事と考え、「全員で声を出して数えてみようよ。跳び方はもうマスターしてるから、きっとファイトの問題だよ。」と一緒に輪の中に入る。

ようやくA子を含めて全員の声が出始めると、徐々に調子を上げ、上手に跳べるようになってくる。縄回しのB男・D男が「〇〇君! 後ろに下がってきてるよ! もっと前に行けよ!」「ガンバ! ガンバ!」の声。グループは再び意欲を取り戻してきた。失敗しても、グループで話し合い、並ぶ順番を変えてみたりする。お互いに「ガンバと!」という励ましの声が飛び交い、非難の声は消えていた。

やったぞ 53回!

1回目の記録挑戦は35回。それでも練習中の記録から見ればベスト。

他のグループは疲れるからと休んでいるときにYグループでは、いよいよ3回目の記録に挑戦である。この時間で挑戦できる最後の1回となりそうだ。見ていた他のグループからも「ファイト! ガンバ!」の声。縄回しで腕が思うようにならな

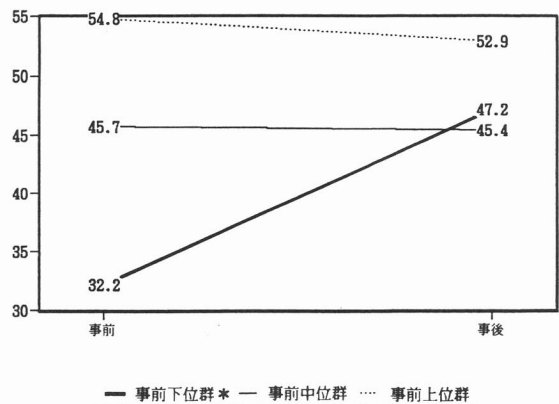
いと訴えるB男とD男にも、「もっと大きく腕を回せ! がんばれ!」の声が掛かる。A子も、思いつき足上げて本気になって跳んでいる。

これでまたグループがまとまったと感じられたとき、「・・・51! 52! 53!」「やったあ! 53回最高記録!」との声が上がった。最高記録で終了したYグループの男子はB男とD男の所に駆け寄り握手し合い、女子はA子へ駆け寄り、手を取り合って喜んでた。時間終了ということでそのままYグループは、第1回長縄跳びの優勝グループとなったのである。

(5) 児童の変容と考察

① 学級について

学級の事前・事後調査の調査3に関して上・中・下位群別に見ると、図Ⅲ-1のように、下位群では大きな意識の変容が認められた。



図Ⅲ-1 所属と愛情に関する学級の変容

このことは、長縄跳びが下位群の児童の「所属と愛情」の意識を高めていく上で、特に有効であったと考えられる。

しかし、上位・中位群では意識の高揚が認められず、長縄跳びが「所属と愛情」を満たすにふさわしい種目であったか一考を要する。また、指導援助の過程で、担任のことばかけや、認め励ましが十分でなかったことも考えられる。

しかし、意識調査3の項目の中で、特に以下の項目に大きな伸びが見られた。